

活動報告書

報告者氏名:稲葉智章 所属:茨城県立水戸飯富特別支援学校

記録日:2014年2月3日

【対象生徒の情報】

・学年 中学部 2年

・障害名 知的障害

・障害と困難の内容

・意味のある発語はこれまでほとんど見られなかった。要求などがあるときは身振り手振りや無意味音声で相手を呼ぶなどするが、正確に要求を伝えることは難しい。

【活動目的】

・当初のねらい

コミュニケーションの手段を保障し、生活の中での活用を図る。まずはシンボルなどを用いて、必要な要求を行なう経験とそれによって望みのものを得られる経験をさせたいと考えた(A)。また、キーボードなどを使って内言語を引き出す活動を行いたい(B)。保護者に対しては、日々の学習内容を家庭でも汎化できるよう、写真や動画など用いた連絡を行いたい(C)。

・実施期間

2013年4月より2014年3月まで

A-iPad内でシンボルを使った要求を行なった。実施日は4月より毎日、随時。

B-物の名前などを学習したときに、キーボードを使った入力を行った。実施日は5月より、毎週木曜日の1時間(自立活動)。

C-連絡帳の補助として、学校での様子を撮影し持ち帰った。実施日は、6月21日(金)より毎週金曜日。

・実施者

稲葉智章

・実施者と対象生徒の関係

学級担任

【活動内容と対象生徒の変化】

・対象生徒の事前の状況

困った時などに身振り手振り・発声で要求はするものの、具体的に伝えるのが難しいため相手に正しく伝わらないことがあった。また、家庭では DS 等を使って文字を入力できるという情報はあったものの、そのスキルを使ってコミュニケーションを取る状態には至っていなかった。

・活動の具体的内容

初めは、教員が持っている iPodTouch を使いたいという要求を表すため、「DropTalkHD」を用いて 2 枚(「iPod」「かしてください」)のシンボルを並べ、押すと要求ができるようにした (Fig.1)。後に「絵カードコミュニケーション」を用いて、自分で必要なカードを選んで配置する活動も行った。

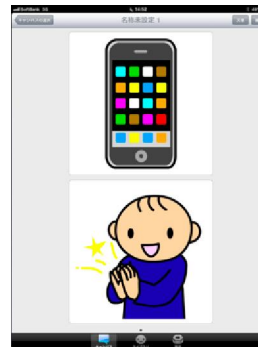


Fig.1



Fig.2

また、自立活動の時間には必要なカードとともに「かなトーク」でキーボードを並べて置き、徐々にキーボードへ入力することで行きたい場所を伝えたり人を指したりすることも目指して活動を行った。身近な食べ物や物、人の絵・写真カードを見てその文字をキーボードで打ち出す学習も行った (Fig.2)。

保護者に対しては、日々の様子を「カメラ」で動画撮影して持ち帰り、学習内容等の情報を共有できるようにした。

・対象生徒の事後の変化

生徒は必要ときにホームボタンを押し、「DropTalkHD」を起動して必要なシンボルを出し、要求をするようになってきた。「絵カードコミュニケーション」を用い始めると、自分でアプリを立ち上げ、2～3枚のカードを使って要求を出せるようになってきた (Fig.3)。



Fig.3

キーボードを用いて物や人の名前を確認する活動では、間違えて覚えているものも 2～3 度入力を行なうことで、正しい文字列を打てるようになった (Fig.4)。50 音表示のキーボード自体にも興味を持ち、自ら YouTube アプリを使用して動画を探す姿も見られるようになってきた。



Fig.4

家庭での使用では、兄弟の協力もあり当初から食事の様子や余暇の様子などを撮影していただいた。従来の連絡帳も併用しているが、iPad を用いると様子が良く分かるとコメントをいただいた。さらに、家庭で「絵カードコミュニケーション」を用いて自分の要求を正しく伝える様子が見られた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

1. 周囲の大人が想定していたよりずっと多くの語彙を理解していることが分かった。

→ 本人が表現しやすい手段が提供されたことで、表出する機会が生まれたのではないかと。

2. コミュニケーションの方法に変化が生まれた。

→ AAC を用いたコミュニケーションで相手に要求が伝わったり、望んだ物が手に入ったりする経験を通して、より伝わりやすいコミュニケーションの方法が確立してきたのではないかと。

○ 上記の内容は、テクノロジーが生徒の QOL を高めることができることを示している。同時に、彼の力をより高められる学習方法があることも示している。これまでは文字をなぞる学習を中心にしてきており、その中で学習・記憶した文字もあると考えられるが、表出する手段として使うことは難しかった。今回は文字・絵・写真などを容易に選択・入力できる iPad を用いたことで、本来彼が持っている力を発揮することができたと考えられる。本当に必要な学習をその人に合った方法で行うという基本の大切さを改めて認識させられた。

・エビデンス(具体的数値など)

1. 果物や食べ物の絵カードを用いた授業では、書く活動で文字を表現するのはほぼ不可能であった。(なぞり学習は可能。)同じ絵カードを用い、キーボードで表出した場合は、8割程度の正答率で平仮名を入力でき、対象によっては片仮名に切り替えて入力することができた。間違えて覚えていた言葉も、2～3回程度の訂正で正しく覚えられた。

※ 正答率の例 食べ物カードの場合 25/31枚

2. 現在では、iPadを借りる、イヤホンを借りる、エプロンのひもを結んでもらうなどの事項に関しては7割以上の割合で絵カードやVOCAを使用している。

※エプロン着用支援の要求 0回/週⇒3.5回/週(1カ月平均)

・その他エピソード(生徒の実態と活動内容についての補足)

対象生徒はシンボルの機能を理解しかけている段階といえる。そのため、当初は絵・写真などのシンボルを使った要求の学習を始めた。また、彼の中で絵や写真と文字が一致しているものが多くあったため、語彙を引き出し、増やし、使うというねらいでの学習も行った。長期的には、シンボルが用意されていない場面に出合った時、キーボードで意思を表出できるとよいと考えている。現時点では、その基礎の段階としてシンボルを使った要求と正しく覚えている語彙を増やすという学習を行っている。